

フロイト、ラカン、グリーンそして言語  
(原題 Freud, Lacan, Green et le  
Langage, «Autour de l'œuvre d'André  
Green» 所収、 p.259-286), Gilbert  
Diatkine\*

フォント : Optima

**bold**→**bold**

«» → 『』あるいは「」あるいは訳文の後に原文

イタリック→『』あるいは「」

イタリック(原文)→イタリック

«»→「」

大文字→〈…〉, 例、Moi→〈自我〉、Autre→〈他者〉

ルビ→下線+(…)

訳者挿入 : (…=訳者)

言語について、〈例えばBedürfnis〈独〉

原注(脚注) : 1), 2), 3), …

訳注 : 〈1〉, 〈2〉, 〈3〉, …

Standard Edition : *SE*

p. 259

アンドレ・グリーンが言語についての精神分析理論を構築するに至った経緯を理解しようとするとなると、フロイトの著作に見出される解釈技法とそこから導き出された理論とのあいだにある矛盾について述べてゆくことから説明を始めていってもよいであろう。現にしばしば、フロイトは、技法の具体例を提示する際、解釈の出発点は患者の発した多義的なことばであった。ともあれ、著作にあたりフロイトがまず着目したのはこのようなことばであったのだが、解釈の理論となると、かれはそのことにページを割くことはほとんどなかったに等しいといってもよい。ということで両義的なことばは等閑視されていた。そこにラカンが登場し、言語というものを系統的な研究対象とするに至ったのである。アンドレ・グリーの独自の理論は、ラカンの作品を丹念に読み、そこからラカン批判を緻密に行ったことで構築されていった。

## フロイト

### 解釈の実践における多義的なことばの居<sup>3)</sup>場所

『ヒステリー研究』において既に、フロイトとブローアはヒステリーの症状は「一種のある言い回し(フラーズ)でなにかを表明している」こと、そしてこの言い回しに隠された意味はしばしば地口(ジュー・ドゥ・モ)

が下敷きになっていることを見出している。

\* 精神分析家、パリ精神分析協会会員

p. 260

このような例としては、エリザベート・フォン・R…<sup>1)</sup>とセシル・M…<sup>2)</sup>を挙げておこう。『夢解釈』(1899-1900)における同一母音に基づく解釈の例はあまりにも多く<sup>3)</sup>、フロイトは、「ある心的要素が別の心的要素とうわべ上の連想で結びついているとき、例えば…同母音、多義性…つまり機知とか冗談に用いるような連想に結びついているとき…これら二つの心的要素のあいだには、常により正確で深いところでの結びつきがあるのであるが、それには抵抗と検閲の影響下にある」<sup>4)</sup>として一法則について述べる事が出来たのである。そうしたことで、一方で、語(モ)のあいだでの結びつきがあり、他方で、無意識的表象とのあいだでの結びつきがあることになる。どう法則は分析セッションでの解釈にも有効である<sup>5)</sup>。フロイトはこのことを自身の臨床的著作であるドラ<sup>6)</sup>、狼男<sup>7)</sup>で例証しており、さらに『オカルティスム』<sup>8)</sup>、『フェティシスム』<sup>9)</sup>といった論文にも連なる。

このような精神分析における同母音の問題が生じてくることにフロイトは動揺し頭を抱えた<sup>10)</sup>し、かれの友人たちは尚更であっ

た。ブロイアーなどは、重度のヒステリー患者がやらかす悪い冗談に過ぎないと考えていた<sup>11)</sup>。フリースはフロイトが夢解釈での試みているもの読んで、特に機知に富んだ夢主にのみ当てはまると看做した。フロイトはこれに対して1899年7月11日の手紙のなかで、機知によって抑圧される欲動(タンダンス)は明るみに出されると反論し、ここから冗談と滑稽なものについての理論を引き出すつもりだと述べている<sup>12)</sup>。

このフリースへの返事のなかで、後に『機知 - その無意識との関係』<sup>13)</sup>で展開される内容の萌芽が示されている。すなわち、多義的な語、機知は抑圧された欲動の満足を可能にする。何故ならば、この抑圧された欲動は圧力が加えられていて直通への道は阻まれている(バレ)からである。

1) S.Freud et Breuer, *Étude sur l'hystérie* (1895), p.150 <1> 以下、巻数、ページ数のみ示されているのは2003年版, Siegmund Freud, *Œuvres complètes*, PUF, のものである。

2) *Ibid.* p.145, n.1.

3) とりわけ以下を参照されたい : p.268, (*SE* 4, p.299), p. 271-272, p.401,, n 1a (1911)

4) S Freud, *L'interprétation du rêve* (1899-1900), VII A, p. 583 (*SE* 5, p. 530)

5) S Freud, «Fragments d'une analyse d'hystérie (Dora) » (1905), p.47, n. 1.

6) 例えば、 p. 33, 67, 77.

7) S. Freud, «Histoire d'une névrose infantile (L'Homme aux loups) » (1914) ; 例えば : p. 349, n. 2 ; p. 352 ; n. 1, p. 397.

8) S. Freud, «Rêve et occultisme» (1933), p. 67-68.

- 9) S. Freud, «Le fétichisme» (1927).  
10) 例えば *L'interprétation du rêve*, p. 337 (SE 4, p. 293)参照のこと  
11) J. Breuer, «œconsidérations théoriques», *Études sur l'hystérie*, Paris, PUF, 1956, p. 166同様に p. 173も参照のこと。  
12) S. Freud, «Letters à Flies», p. 371  
13) S. Freud, *Le mot d'esprit* … (1905).

p. 261

両義的な語が『カムフラージュされた』(タンダンシユ)語義により、欲動は『他愛のない(イノサン)』<sup>1)</sup>意味で蓋をされながらも生き続けることが許されている。多義的な語は置き換え(デプラスマン)が容易に生じやすいのだ。しかしながら、フロイトも『夢解釈』のなかで指摘しているように、置き換えは「まったく異なった心的領域」で生ずる。一方は無意識的表象の領域であり、もう一方はことばによる定式化(フォルミュラシオン・ヴェルバール)がなされる領域である。さらには、ことばにおける洒落は心像(イマージュ)形成に好都合なのである。夢においてはこのことは形象化可能性(フィギュラビリティ乃至プレゼンタビリティ)へと結びつく<sup>2)</sup>。

『夢解釈』には、以下に列挙する、これとは異なる言語における必要な留め書きが存在する。

1 / フロイトにとって関心事となっているのはただひ

とつ、思いがけないシニフィエ、性的なシニフィエであり、これを両義的な語は検閲をかい潜り忍び込ませる。語の音声的物質/題材は、後にソシュールが「シニフィアン」と呼ぶことになるのだが、偶発的なものである3)

2 / 夢の作業にとって、語はけっして特権的にあ場所を占めない。そうでなくとりわけ潜在的思考により選ばれた(夢の思考による=訳者)題材である4)。

3 / しばしば、夢で用いられるのごはものの視覚的イメージである5)。

4 / 症状と夢は言語を借りるが、それは出来合いの、そのまま利用できる象徴的題材としての言語である6)

5 / 「いくつもの表象の結節点である」語が「いわば多義性を担わされている」7)のだとすると、言語がそもそもそのように出来ているということになるし、さらに夢あるいは神経症の症状として現れる退行も人間の始原への退行ということとなる。始原へということになると、すべての語は二重の意味をもつことになり、性的始原をもつことになる。この点についてはフロイトはかれと同時代の二人の言語学者に依拠している。

1) 同掲書., P. 132.

2) S. Freud, *L'interprétation du rêve*, p.212 (SE 5, P. 339).

3) *L'interprétation du rêve*, p. 212 (SE 4, p.174).

4) フロイトは繰り返しこのことを正に規則と呼べる規則として述べてい

る : *L'interprétation du rêve*, VI a, p. 347 (SE 4, p. 313) VI F, p. p.466 (SE 5, p. 418).

5) *L'interprétation du rêve*, p. 80 (SE 4, p. 50)およびVI A, p. 339 (SE 4, p.295).

6) 同掲書., p. 394 (SE 5, p. 349).、

7) 同掲書., p. 385 <1>. (SE 5, p. 339-340)

<1> 原文はP. 387とあるがP. 385の誤りである。

p. 262

ひとりはカール・アーペルであり、かれによれば、始源語はすべて二重の意味を持つとされる<sup>1)</sup>。もうひとりはハンス・シュペレバーである。かれによれば、あらゆる語のルーツは性的なものということになる<sup>2)</sup>。現代の言語学者の何人かはシュペルバーにしるカール・アーペルにしる、考え方に整合性がないと述べている<sup>3)</sup>。系統発生的な象徴的価値という考え方も、フロイトの系統発生論についての諸思想に対する全般的批判に準じて退けられるようになってきているのである<sup>2)</sup>。

## フロイトの解釈理論は自我心理学に属するものである

理論的立場からはフロイトは、患者の側からも分析家の側からも、語の両義的解釈の役割について述べていもしない。精神分析的解釈とはふたりの意識的『自我』のあいだの同盟の結実なのだとしてこう述べている。「分析中に起きていることとは、周知のごとく、(分析家と

分析主体の=訳者)ふたりが互いに対象である人物(ペルソナ-オブジェ)からエスの制御できない諸部分を支配下に置くため、自我になることができたなら、ということなのである」4)と。

解釈とは、「導き出し/翻訳(トラデュクション)」、「連想による矯正」5)であり、無意識的記憶を意識化させ情動の除反応を促す。「解釈の手法」とは、玉石混交の原石を精錬によって抑圧された思考である純金属を得ることにある6)。分析は、患者の意識に、分析技法の助けを借りて、分析家のことばで無意識的コンプレックスを示してゆくことである7)。解釈するとは、無意識を意識化させることであり8)、このことは患者の今ある心的表層を探り、抵抗に打ち勝つようにすることである9)。また、転移を解き、新たな抑圧を防ぎ、無意識を意識へと統合させ、依ってこの無意識を投げ打って、自我を強化することにある10)。

1) S. Freud, «Sur le sens opposé des mots originaires» (1910).

2) *L'interprétation du rêve* (1925), p. 397, n. 1 (SE. 5, p. 352, n. 1).

3) E. Benveniste, «Remarques sur la fonction du langage dans la découverte freudienne», p. 81.

4) S. Freud, *Analyse avec fin et analyse sans fin* (1937), p. 250.

5) S. Freud et Breuer, *Études sur l'hystérie* (1895), p. 4 et 205.

6) S. Freud, *La méthode psychanalytique de Freud* (1904), p. 4.

7) S. Freud, «*Le petit Hans*» (1909), p. 206

8) S. Freud, «Le maniement de l'interprétation des rêves» (1923), § V, p. 82-83.

9) S. Freud, «Répéter, remémorer, élaborer» (1914), p. 106

10) S. Freud, *Introduction à la psychanalyse* (1916), chap. XVIII, 28e conférence : «La thérapeutique analytique», p. 487.



② 周知のように、フロイトの『トーテムとタブー』はダーウィニズムの系統を引く Ernst Haeckel に負うところが大きい。 「原始群」という神話的事象がエディプス・コンプレックスの普遍性へと論拠づけられている、という批判に繋がるということが本論では述べられているのである。

p. 263

## ラカン

### 無意識は言語のように構造化されている

1936年から既にラカンは、「パロール」に並々ならぬ関心を寄せており、治療において発せられる、否、「高らかに宣言される」！語に対して神託とか福音にも似た価値が与えられている風ですらあった<sup>1)</sup>。しかしながら初期の業績から『ローマ講演』<sup>③</sup>に至るあいだにラカンは、ポスト-フロイトの第一世代がかれの世代に伝承した解釈理論を徹底的な批判を準備していたのである。この解釈理論たるや、フロイトが教えた理論に準じてはいたものの、エスに代わって(分析家と分析主体の、乃至分析家に倣った分析主体の=訳者)「自我」の同盟、自我の強化に主眼を置いていたからである。ラカンはまた、構造言語学の存在に着目していた。構造言語学にかれは期待を寄せていたのである。フロイトが真に唱えたものに忠実に、両義的な語が果たす役割に基づいた

精神分析についての言語理論をうち立てることができる筈だと。ロマン・ヤコブソンは、世界中の言語の音素の全体は極めて少数の関与的特徴の組み合わせと置き換えに還元できるとしている。そしてこの関与的特徴の総体が構造を成しているというのである。そして、この関与的特徴のひとつでも変更が加えられると、他の関与的特徴はすべてその価値を失うとされる<sup>2)</sup>。言語がある構造を持っていて、多義的な語が精神分析において中心的な役割を成すとなると、「構造的な精神分析」を構想することが許されることになる。フロイトをこの構造的な精神分析に結びつけることでラカンが主張することとは、神経症の症状は「言語的構造」<sup>3)</sup>を持っており、「夢は一つのフレーズ、というよりも判じ絵の構造を持っている」<sup>4)</sup>ということになる。そして無意識全体が言語のように構造化されている<sup>5)</sup>、という帰結にたどり着くこととなる。

1) J. Lacan, *Au-delà du principe de réalité* (1936), p. 82-83.

2) R. Jakobson, *Phonologie et phonétique* (1956).

3) J. Lacan, *Fonction et champ de la parole et du langage en psychanalyse* (1953), 259 et 269.

4) 同掲書, p. 267. 判じ絵の構造とは何なのかという問いを立てても良いであろう。

5) J. Lacan, *Le Séminaire, livre V : Les formations de l'inconscient* (1957-1958), p. 49. ソシユールは言語(ランゲージュ)の定義として、言語学による研究成果の不調和な総体だとしている。つまり言語は、実のところ、言語学の視点から見ると、明らかに何ら「構造」など有していないということになる。同様な批判は、むしろラカン寄りの言語学者エミール・バンヴェニストにより1956年の『フロイトの発見における言語

の機能についての覚書』 *Remarques sur la fonction du langage dans la découverte freudienne*以来述べられている。バンヴェニストは無意識が構造化されていることには異議を唱えてはいないが、どのように考えても、これが「ある言語のように」«comme un langage»とは考えられないとしている。一方で、ことばの文彩(あや)と無意識の一次過程とを比較することには同意している。ロマン・ヤコブソンとなると、『言語のふたつの側面とふたつのタイプの失語症』 *Deux aspects du langage et deux types des aphasie*のなかで、バンヴェニストに対して反対意見を述べている。一次過程は特定の文彩として分類することなどできない、と。

〈3〉 *Discours de Rome*をこのように「講演」と定訳が出来上がっているが、ラカンのLによるディスクールは様々な邦訳が可能であろう。訳者としては『ローマ演説』と訳した方がしっくりくる。

p. 264

行き着くところラカンは、言語についての論弁を「原初的象徴的構造」の域まで拡幅し、言語、無意識、さらに親族構造、その上に数学までも共通するものとして組み込み、「象徴的秩序(オルドゥル)」と称す。「蓋し、この構造においては調和が保たれているのですがそこにはいくつかの禁則もあり、これによって(婚姻における=訳者)交換に制約が課せられ、これが一般化されます。民俗学においてこのような法則が観察され、理論的民俗学者は驚きをもってこの組み合わせの論理を見出すことになるのです。畢竟、この論理は数の法、言い換えれば究極的に純化された象徴なのであり、原初的象徴

主義に内在するものであることが証明されるのです」

1)。

ラカンにおけるこのような言語構造の理論的一般化は、レヴィ＝ストロースの1949年に書かれたテキストに負っている。本テキストはレモン・ドゥ・ソシュール<sup>4</sup>に敬意を示して上梓されたものであるが、そこでは言語構造の一般化が極度に思弁的なかたちで定式化されている。シャーマンの治療の有効性を説明するにあたり、レヴィ＝ストロースが主張するアイデアにおいては、シャーマンの儀式が病者に与えるものは「一種の言語であり、この言語により、定式化されない、あるいは定式化不可能な状態が直接的に表明される」とされる。この言語は「断じて非時間的な…構造の法」に準じているものと想定される。無意識の諸構造もすべてこの法に当てはまるものであるが、この構造の数は僅かなものに限られており、これは「音韻論の法」だけで言語の全体を説明するのに十分であるのと同様である。こうも言える、極限られた要素的タイプだけで神話や童話すべてを説明できる<sup>2</sup>。

畢竟、「言語学的分析は…一言で分析と密接な関係をもつ。両者は同等である。仔細に較べてみれば、両者は本質的に別物ではない」<sup>3</sup>となる。ラカンはこの言語構造とその他の構造それぞれの概念を大いに敷衍してこれらをほとんどオーバーラップさせ、メタフォールを置き換えに、メトニミーを圧縮に等式化しさらにはシニフィアンを無意識的表象と等価なものとしていったと断言で

きよう。

## メタフフォルと置き換え

フロイトが両義的な語が置き換えを促すと述べているのであるから、当然のこととして、ラカンの試みとして、この置き換えに戦略的なポジションが与えられることとなる。

1) J. Lacan, *Fonction et champ de la parole et du langage en psychanalyse* (1953), p. 277

2) C. Lévi-Strauss, «L'efficacité symbolique» (1949), p. 223-225

3) J. Lacan, *Le Séminaire, livre VII : L'éthique de la psychanalyse* (1959-1960), p. 12

4) フェルディナン・ドゥ・ソシュールを父に持つ精神分析家であるが、ラカンはかれに対して侮蔑的態度を表している。ラカンがスイスにおいて存在感が薄いのはレモンの影響であるとも言われている。

p. 265

フロイトにおいては、ある欲動は禁じられた満足に向かうのであるが、多義的な語によりこの「偏向、倒錯的な」(タンダンシュー)意味を「人畜無害な」(イノサン)意味へと自らずらして(ス・デプラッサン)なされるとしている。この点を言語学的用語を用いてラカンは書いている。多義的な語においては、語が「シニフィアン」と「シニフィエ」に分解する。シニフィアンは一見最初の「人畜無害な」シニフィエに結びついているように思わ

れるが、「偏向、倒錯的な」第二のシニフィエに結びついていることが明らかになる、と。

### 1) 「メタフォールと看做される置き換え」

フロイトの考えでは、欲動が自ら位置をずらせ新たな表象を見出すという風になっている。しかしながら分析家の方からすると、多義的な語が発せられるのを聴くこととなる。ラカンからすれば、位置をずらすものとはシニフィアンであり、分析家の聴取においてS1とS2としてふたつの位置に継時的に移動することになる。このように位置をずらせることによりシニフィアンは新たな意味を「運ぶ」ことになる。そしてこの移動をラカンはメタフォールと呼ぶのである。例えば«atterré»という語は文字どおりには「地に倒される」(ミ・ザ・テール)であるが、誤った意味で通っており、「怖い」(テリフィエ)という意味となっている。これは«ter»というシニフィアンが「地」«terre»から「恐怖」«terreur»へと移動し、この後者の意味が附せられているが、語源としては誤用されているのである<sup>1)</sup>。

同様に、『諸世紀の伝説』のなかでヴィクトル・ユーゴーは老いたボアズについて「かれの麦束は露ほども吝嗇なところも不毛なところもなく」«Sa gerbe n'était point avare ni ingrat»と書き表している。

「麦束」というシニフィアンは「人畜無害な」シニフ

イエを指し示している。つまりボアズは地主であるが、金持ちの割には気前がよいことが示されている。これは部分が全体を示す文彩であるメトニミーとなっている<sup>5</sup>。しかしながら二番目のシニフィエはずっと「淫欲的なもの」であり、そこにこのメトニミーが現れる。束の噴出はボアズの老いとの関連から、刈り入れどきにおける若い百姓娘との性的関係のイメージと老人の老いらくの恋における生殖力への望みが見て取れる<sup>2)</sup>。ここでも「麦束」というシニフィアンと「ボアズ」というシニフィアンとのあいだでの意味の転移(てんい)、メタフォールがあり、無意識的な幻想である新たな意味が現れてきているのである。

ラカンが置き換えの一面的な記述に終始しているように見える。しかしかれはかれならではの新機軸を織り込んでいるのである。無意識的な性的玄宗は固定された主体の無意識に局在しているだけではないからである。

1. J. Lacan, Le Séminaire, livre V : Les formations de l'inconscient (1957-1958), p. 34.

2. Ibid., p. 31.

〈5〉 部分で全体を示す文彩といえは、通常提喩synecdoqueにあたるが、synecdocもmétonymieの変種だともされているcf. [https://fr.wikipedia.org/wiki/Figure\\_de\\_style](https://fr.wikipedia.org/wiki/Figure_de_style)

心が騒いでるのは誰においてなのか。誰が性的幻想を抱いているのであろうか。ボアズなのか。ヴィクトル・ユーゴーなのか。あるいは読者なのであろうか。ラカンの考えでは新たな局所(トピック)が創出され、そこでは固定した主体においてのみ無意識があるわけではない。

## 2) 「置き換えとしてのメタフォール」

ラカンは置き換えという概念を言語学の方へと仕立て直すにあたって不徹底なところがあった。メタフォールトという言語学の概念に自己流の解釈を施し置き換えの概念へと重ね合わせたのである。本来、メタフォールはふたつのシニフィアンを関連づけして新たなひとつのシニフィエを生じさせるものではない。メタフォールは直喩と同列のものであり、ふたつの記号のセット間の関係がふたつのシニフィアンとふたつのシニフィエとのあいだの関係が問題になっているのである。『機知 - その無意識との関係』のなかでフロイトは延々とメタフォールについて論じているが、ラカンのメタフォールの定義を知ったならば仰天したに違いない。とはいえ、フロイトとて言語学者ではなかったのであり、ラカンはローマン・ヤコブソンの威を借りていることを憚らない。ヤコブソンはメタフォールが置き換えと類似していることを主張した最初の言語学者だったとしてよいであろう<sup>2)</sup>。ところがかれは、『夢解釈』に言及している箇所において、置き換えは寧ろメトニミーと関連性があると看做し



ている<sup>3)</sup>。ラカンとの齟齬について質問を受けてヤコブソンは、無意識の一次過程による諸事象と言語における個々の文彩を一義的に結びつけることはできないとはっきり述べている<sup>4)</sup>。

3) 「置き換えでもなく、メタフォールでもなく、無意識の主体というのはひとつの新奇なアイデアである」

ラカンが意味の転移と言っているものがフロイトの理解していたい意味での置き換えでもなく、言語学者たちが主張するような意味でのメタフォールでもないことが前段で明らかになった。かれが精神分析に持ち込んだ重要かつ新奇なアイデアとは「無意識の主体」であり、この主体とは無意識的幻想の創案者でもあり主人公でもあるのだが、それもふたつのシニフィアンとの関係においてそうなのである。

1. S. Freud, Le mot d'esprit... (1905), p. 118-128.

2. J. Lacan, Le Séminaire, livre V (1957-1958), p. 30.

3. R. Jakobson, Deux aspects du langage et deux types d'aphasie (1956), p. 65. 4. Ibid., p. 65, n. 1.

p. 267

一般的法則としてラカンが措定しているのは、無意識の主体が出現するためにはふたつのシニフィアンの接近が必要だとしているところである。この想定から、シニフ

ィアンについてよりも主体についてであるが、パラドキシカルな定義が導き出される。すなわち「ある〈6〉シニフィアンはもうひとつ別のシニフィアンに対して主体を代表する」である。

グリーンはコミュニケーションには二項的な枠組みの構造が必要だとは認めているが、ふたつのシニフィアンの構造という点については異議を挟む。あるシニフィアンが特定のひとつのシニフィエ、あるいはふたつのシニフィエと結びついている構造なら判るが、とも述べている<sup>1)</sup>。

## 圧縮とメトニミー

メタフォールの場合と同様、ラカンが「メトニミー」と称しているものも、フロイトがいう圧縮でもなく、言語学でいうメトニミーでもない新奇な概念である。かれが「メトニミー的対象」と呼んでいるものは、母親、〈他者〉において欠如しているものであり、主体は母親にとってこの欠如を埋める対象とはなりえない。ラカンにとっては、欲動の目的はフロイトが言っているような性的欲望の満足ではなく、フェアバーンやボウルビイの対象の探求でもなく、〈他者〉による承認なのである<sup>2)</sup>。欲望の満足とは「満ちたパロールの受託(ラソンプション・ドゥ・ラ・パロール・プレーヌ)」すなわち「己れに〈他者〉をもつ」<sup>3)</sup>ことだといえる。ところが実際は

そのような至福(ベアティチュード)など叶わぬものである<sup>4)</sup>。というのも〈他者〉の場所には「禁止、超自我、その他諸々があるからである」<sup>5)</sup>。つまるところ〈他者〉はそれ自体がシニフィアンの連結にしたがっているのであり、シニフィアンの〈他者〉に与える効果は「去勢そのもの」に他ならない<sup>6)</sup>。畢竟、〈他者〉は常に変わらず欠如しているものということになる。

なぜラカンは〈他者〉において欠けている対象を「メトニミー的」<sup>7)</sup>と呼ぶのであろうか。またこのような規定に基づくメトニミーと圧縮とのあいだにはどのような関係があるというのだろうか。

1. A. Green, *Le langage dans la psychanalyse* (1983), p. 165.

2. J. Lacan, *Le Séminaire, livre V* (1957-1958), p. 256.

3. *Ibid.*, p. 133.

4. *Ibid.*, p. 148.

5. *Ibid.*, p. 149.

6. *Ibid.*, p. 464.

7. *Ibid.*, p. 133.

〈6〉 ラカンはしばしばテーゼとして発するのは *Un signifiant représente le sujet pour un autre signifiant* であるが、本テキストでは *Le signifiant représente pour un autre signifiant* となっている。ここでは不定冠詞で「あるシニフィアン」と訳した。

メトニミーの一種は文彩としては、コンテイナーがコンテインド<sup>7</sup>によって示されるともいえる。文彩でいえば、〈他者〉において欠如している対象にもっとも相応しいのは部分が全体を示す提喩ではないであろうか。ともかくも、換喩をメトニミーの変種と看做すとしても、〈他者〉において欠如する対象との関わる表現は「メトニミー的」とされるのである。圧縮との関連について言及している言語学者はヤコブソンだけであるが、かれは圧縮を提喩の側に分類している<sup>1)</sup>。

「ボアズの麦束」の例で示したように、ラカンにとってはまず第一に、すべてのメタフォールがメトニミーを前提としている<sup>2)</sup>。逆に、メタフォールによって穿たれた空隙にあらゆるメトニミーは挿入されうる<sup>3)</sup>。しかしながらラカン自身も白状しているように、かれが与えたこれらの定義を具体的な事例において見出すことは容易くはない<sup>4)</sup>。

いずれにしても、メトニミー的对象という概念からは、特定の発達段階において、ある主体とかある対象とかにこれを当てはめることはできない。すでにそこには〈他者〉において欠如しているものとしての第三項が関わっているのであり、この欠如している対象に完全に主体が置き換わることは叶えられない。このことでグリーンは、再考することとなり、「代替可能な第三項の一般化された三角関係」といったアイデアを提出することとなる。

## 無意識的表象とシニフィアン

無意識的表象とシニフィアンを同等のものとする  
ことによりラカンは、精神分析に言語学の諸概念を強引に  
当てはめ、ほとんど魔術とっていいようなトリックを使  
う。

### 1) 「シニフィアンの自律性

言語学の側からすると、ラカンにとっては、まず、音  
素をシニフィアンに移し替えることが必要になってく  
る。というのも、言語学において構造を構成するのは  
音素の関与的特徴(トゥレ・ペルティナン)の全体であ  
り、「シニフィアン」の全体ではないからであ  
る。「atterré」の例でみると、「ter」が音素ではなく、な  
かんづく音素の関与的特徴などではなくシニフィアンな  
のだということになる。

1. R. Jakobson, Deux aspects du langage et deux types d'aphasie (1956), p. 65.
2. J. Lacan, Le Séminaire, livre V (1957-1958), p. 75.
3. J. Lacan, « À la mémoire d'Ernest Jones : sur sa théorie du symbolisme » (1959), p. 708.
4. J. Lacan, Le Séminaire, livre V (1957-1958), p. 40 et 73.

〈7〉 例えば<https://www.encyclopedia.com/psychology/dictionaries-thesauruses-pictures-and-press-releases/container-contained>参照のこと。

同様にラカンは自論に合わせるため、言語学者もそうだが精神分析家にとって商売道具であることばに手を加える必要があり、シニフィエのないシニフィアンということになる。例えば、『快感原則の彼岸』における糸巻きを手にする赤ん坊はシニフィアン«O」と

シニフィアン«A»を対比させているのであり<sup>1)</sup>、そこではグリーンが指摘しているように«fort»と«da»というふたつのことばは排除されている<sup>2)</sup>。シニフィアンとシニフィエの解離は多義的な語のなかでなにが起きているのか説明するにはうまくゆく。このことを言い換えるとただ、精神分析家は一般人とは別の耳をもっていてことばを聴く、となる。ボアズの麦束におけるメタフォールにおいては、シニフィアンはいくつかあるが、シニフィエはただひとつだけである。ただこのシニフィエはひとが思っているのとはまったく異なっているのである。ところがこのシニフィエは一瞬にして臃げになる<sup>3)</sup>、そして舞台を去る。ラカンが言うには「メタフォールの効果が発揮されるのは単にあるシニフィアンから他のシニフィアンへの代替だけである」<sup>4)</sup>、<sup>8)</sup>。例えば、旅人が砂漠でヒエログリフを発見するとする。これはある主体がこれを刻み記したのは確かであろう。現に各ヒエログリフはその次のヒエログリフに繋がっているから。旅人には

そこになにが書かれているのかまったく解らないのだ。これは主体ということにはならない<sup>5)</sup>。無意識の主体とはふたつのシニフィアンの出会いによって噴出するのだ。シニフィエは解らないとしてもだ<sup>6)</sup>。このシニフィアンの自律性は晩期ラカンに至ってまでさらに強調されるのだ<sup>7)</sup>。

このような考え方は精神分析の技法上の由々しき帰結に通ずる。こうである。内容はどうでもよい。正当的な解釈を与えるためには同音できちんと「発語する(スカンデ)」ことさえすればよい<sup>8)</sup>と。

アンドレ・グリーンは長きにわたって「シニフィエなきシニフィアン」の非常識さを批判し続けている。

1. J. Lacan, *Fonction et champ de la parole et du langage en psychanalyse* (1953), p. 318- 319.
2. A. Green, *Le langage dans la psychanalyse* (1983), p. 48.
3. J. Lacan, *À la mémoire d'Ernest Jones : sur sa théorie du symbolisme* (1959), p. 705.
4. J. Lacan, *Le Séminaire, livre V* (1957-1958), p. 31.
5. J. Lacan, *Le Séminaire, livre XI* (1964), p. 180.
6. J. Lacan, *Le Séminaire, livre II* (1954-1955), p. 190.
7. J. Lacan, *Le Séminaire, livre XXIV* (1976-1977), p. 3-5.
8. J. Lacan, *Le Séminaire, livre XXIII* (1975-1976), chapitre du 18 novembre 1975.
9. A. Green, *Le langage dans la psychanalyse* (1983), p. 70 et s.

p.270

この奇妙なアイデアがラカンの創意ではなくレヴィ＝ス

トローズを讀んでのことで、そのレヴィ＝ストローズはヤコブソンの「ゼロ音素」に依拠しているじことから、グリーンはもっと多くの言語学者、ヤコブソンからチョムスキーまで検討の範囲を広げラカンへの批判を展開する。かれは意味(ル・サンス)をなおざりにしている。あるいは意味のないもの (ル・ヴィドゥ・ドゥ・シニフィカシオン)<sup>1)</sup>にまで意味(シニフィカシオン)を含ませている、と。

〈8〉 Miller版Le Séminaire V «Les formations de l'inconscient», p. 31にはこのような条は見られない。p. 31に同様な意味が込められた条は認められるが。

## 2) 「シニフィアンと」表象-代表

言語学から借りて来たシニフィアンをあらゆるかたちで歪めと後においても、精神分析の対象たる無意識的表象とのあいだにはなおおおきな隔たりが残る。無意識的表象は理解したり読むことができたりするものではない。シニフィアンと同様である。蓋し無意識の「なかに」あるあるものであり、解釈の作業にぬきには日の目を見ることのないものである。ラカンは綱渡りの的にこの隔たりをその根っこにある表象をもって乗り越える。シニフィアン 表象代表 *Vorstellungsrepräsentanz* であると



断言することによってである。「これらフロイトのテキストにおいてこの表象代表という語にシニフィアンの意味を与えざるを得ない」<sup>2)</sup>とかれは述べる。

#### a) 欲動の心的代表とシニフィアン

表象代表 *Vorstellungsrepräsentanz* は、フロイトにとって、原抑圧において抑圧される最初の表象である。グリーンは次のように区別することができるだろうと説明している。

1/ 欲動の心的代表は、「心というものの仮定的な 原型 (フォルム・オリジネール) であり、身体に根を下ろし、」生まれのままの形で存続している」。

2/ 欲動の心的代表(ラカンのいう表象代表

*Vorstellungsrepräsentanz*) においては、欲動の心的代表は同時に知覚の残滓にも結びついている。欲動の表象代表はつまるところ ものの表象 (ルプレザンタン・ドゥ・ラ・ショーズ) ということになる。

グリーンにとっては、無意識は表象によって構成されており、記号によってではない。ということで表象代表はシニフィアンとはなんら関係がない。無意識は「記号の領野からはまったく締め出されたものなのである」

5)。

1. A. Green, *Le langage dans la psychanalyse* (1983), p. 49.

2. J. Lacan, *À la mémoire d'Ernest Jones : sur sa théorie du symbolisme* (1959), p. 714.

3. S. Freud, « Le refoulement » (1915) (Gallimard, p. 55 ; OC, p. 191).

4. A. Green, Le langage dans la psychanalyse, p. 153.

5. Ibid., p. 75.

p.271

表象代表 *Vorstellungsrepräsentanz* をシニフィアンと同等のものとするため、無意識が主体において隠された内部のように、フロイトの第一の局所論における無意識、あるいはエスのように、表される(ス・ルプレザンテ)ままにしておくことができなくなる<sup>1)</sup>。ラカンはそのようにしたのであり、そこから精神分析理論全体はことごとく改竄されることになる。

b) 情動の問題 - 欲動の心的代表も表象-代表も欲動と代表が結びついた概念である<sup>2)</sup>。ところがラカンのシニフィアン理論においては情動の問題がまったく欠落している(「不安」のセミナーは除くが)。この情動無視の姿勢をとるラカンへの批判がグリーンがラカン批判の第一歩となっているのである<sup>3)</sup>。グリーンはこう考える。ラカンにおいて情動というものが絶命しているのは、これを考慮に入れることで精神分析の構造(主義=訳者)的理論全体に齟齬が生じてしまうからであると。実際のところ、ソシュールの通時的言語学はそれ自体構造的である。ところが情動は通時的である。情動は時間のなかで発散され、これが複雑な無意識的時間の流れとともに表象間において関係性を持たせることになる。このよ

うな展開は「体系化全体を破壊するまでになっても致し方ない」<sup>4)</sup>、ということになる。

c)新たな局所論 - シニフィアンと無意識的表象を同じ心的空間に位置させることにより、ラカン<sup>5)</sup>はトーラス、メビウスの輪のような内部と外部の区別のない、<sup>9)</sup>ような、あるいは鏡のなかに「他者」を見るのだがこの「他者」も自分を見ているような虚空間のようないくつかの局所モデルを構築する。この空間の比較的単純なモデルにおいて<sup>5)</sup>(図1)ラカンは、主体と「他者」とのあいだで交わされるディスクールのふたつのアスペクトを表す曲線を描く。第一の曲線は「主体」(ジュ)から出発し、主体の個別的欲求を表しており、これを「日頃の会話」(ディスクール・クーラン)であり、「他者」へ、母親へ向かうとしている。また第二の曲線はシニフィアンの連鎖であり、「自我」から「他者」へ向かうとしている。

1. Ce refus de l'intériorité a sans doute des racines extrapsychanalytiques dans la phénoménologie, qui avait une place dominante dans le champ culturel à l'époque du Discours de Rome.

2. S. Freud, « Le refoulement » (1915), p. 55.

3. A. Green, Le langage dans la psychanalyse (1983), p. 145. Voir surtout A. Green, Le discours vivant (1973).

4. A. Green, Le langage dans la psychanalyse (1983), p. 204.

5. J. Lacan, Le Séminaire, livre V (1957), p. 95.

⑨メビウスの輪に円盤を貼り付けると、投射平面、ラカンがいうクロス・キャップができるし、ふたつのメビウスの輪を貼り付けると、クラインの壺ができ、前者の文字通りクロスしているキャップの部分、そしてクラインの壺は全体として内部と外部の区別のない曲面となるが、トーラスそのものに内部と外部の区別がないというのは理解しがたい。トーラスの内部と外部の区別をなくすためには「穴」をあけなければならない。事実、セミナーXXIV以降、ラカンはふたつの絡み合ったトーラスles deux tores enlacés(これをラカンは神経症の構造だとする)から、このひとつに「穴」をあけ、裏表 - という表現がこの操作によって意味をなさなくなる。なぜならば、「穴」により内部と外部の区別はなくなるからである - 直観的に裏返すことによってどのような構造が出来上がるかわかる人間は天才であろう。であるからラカンからして、そしてPierre Soury, Michel Thomé等の助力を得て、あるいは本当はかれ等トポロジーの専門家が晩年のセミナーをアニメートしていた、といってもいいのではないだろうか。しかし、ことばによる説明はすでにÉtourdit(Sciliset 4, p. 42-43)でなされているとされる。

p.272

図1(いわゆるLacanの「欲望の図」)のひとつである。

cf. <https://www.cairn.info/autour-de-l-oeuvre-d-andre-green--9782130546429-page-259.htm#:~:text=Le%20cadre%2C%20la%20pulsion%20et,analytique%20une%20th%C3%A9orie%20toute%20diff%C3%>.)

d)新たな欲動の理論 - この空間は主体内部のものでなく、そこでは「欲求、性癖(タンダンス)、要するに欲動」<sup>1)</sup>はまず、日頃の会話の曲線によって表される。しかしながら、もし母親(A, 他者)が「欲求」に対して母

乳を与えたり、母親としての世話をするとすると、これは、語あるいはシニフィアンに込められた愛の要求に応えたこととなる。母親のシニフィアンのシステムは、欲求を濾過し、「方向を変え、変化させ、別なものに移し替え」、要求にしてしまう。「欲求として生まれたものが要求と呼ばれるようになる<sup>2)</sup>。要求はこのようにして、ふたつのアスペクトを持つこととなる。まず要求は欲求を意味する。それと同時に要求はシニフィアンの用語によって構造化される<sup>3)</sup>。愛の要求は無条件のものである<sup>4)</sup>。欲求と要求のあいだに穿たれた溝に欲望は位置を占める。欲望についてラカンが、「要求を超えたところに見出される…ものと定める」<sup>5)</sup>。要求と同様、欲望も絶対的条件<sup>10)</sup>、欲求besoin(Bedürfnis<独>、以下同様)、欲望désir(Begehren)、であるがこれは夢における欲望(願望)であるdésir(Wunsch)、そして要求demande(Forderung)<sup>7)</sup>といった概念はフロイトの欲動概念<sup>8)</sup>をかなり改竄したものである。

1. Ibid., p. 460-461.

2. Ibid., p. 90.

3. J. Lacan, Le Séminaire, livre VII (1959-1960), p. 406.

4. Ibid., p. 384.

5. Ibid., p. 381.

6. Ibid., p. 382.

7. Ibid., p. 387.

8. Ibid., p. 91.

〈10〉この「絶対的」absoluという語については、注意を要する。このことは訳者は何度となく指摘してきたことであるが、ここで繰り返し説明する。ラカンにとって、たとえば絶対知(Écrits, p.802)は非-知によって裏打ちされている。このことはすでにハイデッガーの1930-31年の『ヘーゲルの精神現象学』の講義において述べられている。絶対知der absolute Wissenに関して、「解き離しを行ない〈absolvent〉－解き放ちAblösungに携わり－揺れ動来つつ絶対的である知」、また「絶対者の本質は、無-限な解き離しの遂行die un-endliche Absolvanzであり ... 」とある(Martin Heidegger, Hegels Phänomenologie des Geistes, Vittorio Klostermann, p.71 ; 邦訳, ハイデッガー全集, 第32巻, 95頁, 藤田等訳, 創文堂)。ラカンの思想がポスト・構造主義的であると言えるのは、特にかれの欲望の概念が、閉域clôtureからの離脱détachementという図式で述べられている点を挙げればよからう。

## p.273

グリーンは欲動を言語によって代表させるラカンのアイデアに与していることをはっきり述べている<sup>1)</sup>。かれはラカン同様、マゾシズムについての理論を新たな角度から捉えるため、フロイトの死の欲動のアイデアを受容する<sup>2)</sup>。しかしながら、欲動を母親のシニフィアンにより濾過することの重要性を認めつつも、グリーンはラカンおよびほとんどの言語学者に批判をぶつける。唯一の例外はシャルル・バイイだが。グリーンはラカンのようには、欲動が言語に圧力を加え、シンタックスや語、そしてシニフィアンそのものまで変形させるとはみていなかった<sup>3)</sup>。

e)事後性l'après-coupの再発見 - 重要なことは、シニ

フィアンの連鎖の方向は日頃の会話の曲線の方向と逆向きになっていることである。日頃の会話はまずメッセージにあるM(「自我」)を突き抜ける。ついでそのまま「他者」であるAを通り抜ける。この逆方向性は遡及的、つまり「事後的」après coupに方向をとる。ラカンはフロイトが神経症の病因のなかに事後性を見出したことの重要性を再発見している。ラカンが重視したことは、単にフレーズの最後が遡及的にフレーズの始まりに意味を与える、ということが言えるという点である<sup>4</sup>。しかし最も重要なことはエディプスが前エディプスに事後的に影響を与えるという点である<sup>5</sup>。ラカンの事後性はフロイトが記述している事後性とは多くの点で異なっているのにかかわらず、フランス人精神分析家たちは、おそらく、英語圏の分析家たちよりもかなり前に、改めて事後性に目を向けることができたのはラカンのお蔭だと思っているのであろう。

f)「他者」とナルシシズムの新概念 - 日頃の会話の曲線は、Aのポイントで、語る主体である母親、つまり「他者」と遭遇する。「他者」はまず第一に母親であり、「時として、良い母親としてわが身に引き受ける…」のであるが、単なる母親ではない。「他者」とは「生身の人間ではあるが…同時にほとんど匿名のなにかであり、それはそこに現存するが、そのものに、わたしは到達できる地点として関わる…」<sup>7</sup>。「他者」はまた、主体の無意識を構成するものでもある。

1. A. Green, *Le langage dans la psychanalyse* (1983), p. 62.
2. *Ibid.*, p. 220.
3. ラカンは、ジャック・オーベルがかれにジェイムズ・ジョイスについてのセミナー(ラカン、「セミナー」第XXIII巻、1975-76)を講ずるように提案するや、これを直ちに実行する気になっていた。ジャック・オーベルとそのチームによる「ユリシーズ」の新訳に、欲動がシニフィアンに与える圧力が現われている好例だとするのは適切ではない。ラカンは、ジョイスを精読するというよりは、ボロメオの輪にはまり込んでいたのだ。 *Lacan a été à deux doigts d'en prendre conscience quand Jacques Aubert lui a*

*proposé de faire un séminaire sur James Joyce (Lacan, Le Séminaire, livre XXIII, 1975- 1976). Il n'y a pas de meilleur exemple de la pression exercée par les pulsions sur le signifiant que la nouvelle traduction d'Ulysse par Jacques Aubert et son équipe. Mais Lacan était trop occupé par les nœuds borroméens à cette époque pour lire sérieusement Joyce.*

4. J. Lacan, *Le Séminaire, livre V* (1957-1958), p. 15.
5. *Ibid.*, p. 163.
6. *Ibid.*, p. 460-461.
7. *Ibid.*, p. 117.

p. 274

ラカン同様、ポスト・フロイト主義の精神分析家のほとんどが、主体の心の構造における両親の役割を重視している。かれ等が「他者」についてより「対象」についてより雄弁であってもである。アンドレ・グリーンはラカンの「他者」に対して、ビオンのO<sub>11</sub>同様批判的である。グリーンが言うには、ラカンは絶対的真理であるとする不可知の対象を象徴化していると<sup>1)</sup>。つまり「神学的含意



の嫌疑」があるというのだ<sup>2)</sup>。

日頃の会話は、シニフィアンにより分節化されるが、Mの地点、メッセージの場所でもあり、自我の場所でもある地点に達する。ラカンの考えからすると、自我le Moiは、フロイトによって記述されている防衛機制における作用主とおは程遠く、「メッセージ」、主体に他者へと差し向ける自己のイメージに過ぎないものである<sup>12)</sup>。同様に、主体の欲望の対象<sup>13)</sup>は、他者において欠如したものであり、これを補完するものに過ぎない。図1において、この「メトニミー的」対象はわたしJeと対峙している。

ここに「想像的」と称されるナルシシズムについてのラカンの着想が窺えるのだが、このような考え方に同調する分析家は数多くいる。一方で、自我とナルシシズムとの関係の古典的な概念を崩さず守り続けている分析家も多い。

g)原初の抑圧refoulement primaire - アンドレ・グリーンによる原抑圧は、母親のシニフィアンによる欲動の吸収を主体が奪取すること、と規定できる<sup>3)</sup>。一方、「表象-代表」«représentants-représentation»が原初の抑圧により抑圧されるとすることにより、ラカンの自説においては、表象-代表«Vorstellungs-repräsentanz»はシニフィアンと解するしかない、に帰結することになる。

フロイトの原抑圧Urverdrängungについての考えは、その他の原抑圧refoulement originaire<sup>14)</sup>についての諸家

の理論の源と看做されるといえるだろうが、これらはフロイトのふたつの局所論における無意識とエスを両立させようとする努力となっている。例えば、ラプランシュにおける「あらゆる子供が誘惑される事実 *séduction généralisée* についての理論」<sup>〈15〉</sup>。BraunschweigとFainによる「愛人の検閲」 *censure de l'amante*<sup>4)〈16〉</sup>を挙げておこう。

結局のところ、ラカンにおいては、フロイトの独自の理論はほとんど影響を与えていないことになり、かれの創意が興味深いものであり、これが発展をたどることになるのである。

1. A. Green, *Le langage dans la psychanalyse* (1983), p. 179.
2. *Ibid.*, p. 195.
3. J. Lacan, « Sur Jones » (1959), *Écrits*, p. 710.
4. D. Braunschweig et M. Fain, *La nuit, le jour* (1975).

〈11〉グリーンは「*Penser la psychanalyse avec Bien, Lacan, Winnicott, Laplanche, Aulagnier, Anzieu, Rosolato*», 2013, *ITHAQUE*においてかなりのページをビオンとフロイトの対比についての記述、そしてかれ等に対する批判に割いている。Oとは、記述されえない究極の真理、知覚としても表象としても知りえない真理であるゆえ、いわば否定神学的な神＝真理の証明といえようが、グリーンは神秘主義を排し、言語を尊重する。

〈12〉ラカンは小文字の *le moi* と大文字の *le Moi* を使い分けていたことは確かである。 *le moi* に過ぎないものを *le Moi* と捉えてしまう、つまりラカンからすれば、第二の局所論におけるフロイトの誤謬、さらにこれをさ

らに肥大化させた自我心理学におけるEgoを揶揄してle Moiとしているように読める箇所がある。もっとも、ラカンもフロイトの賦精神分析入門における第二局所論のシェーマを「出来損ないの卵」と呼びながらも、なんとかしてかれのトポロジーで示そうと努力していた。曲面のトポロジーによっても(特にクロス・キャップは欲望の図、「ポアン・ドゥ・キャピトン」を局面のトポロジーでアナロジカルに次元を下げて描いたもの - 「不安」のセミナーでは最初に欲望の図が描かれ、ついで光学シェーマ、ついでクロス・キャップが描かれてゆく - とも察することができる。ところでこの「アナロジー」という語をラカンは忌み嫌っていて、同一性よりも差異性を重視するところはフレーゲの影響も大きいものと思われるが、この同一性よりもさらに原始的な思考形態と貶んでいたのが「アナロジー」であった。

◁13◁ラカン自身はこのような言い方を退ける。欲望の対象は存在しないことから、諸々の対象は欲望の原因となる対象l'objet, cause du désirでしかない、とはっきり言っている(「不安」のセミナー参照のこと)。

◁14◁ラプランシュとポンタリスのフロイトのUrverdrPangungのこうフランス語訳はこちらである。Vocabulaire de la Psychanalyseに従えば、原抑圧についてのフロイトの仮定として、こう書かれている。原抑圧が最初の無意識の形成物の源であるはずだが、そうするとこの原抑圧のメカニズムは無意識の側の備給では説明できない。また、前意識-意識系からの脱備給によっても生じるのでもなく、唯一逆備給によって生じるのである。「逆備給こそが原抑圧の永続的な消費を表しており、この永続性を保証するものである。逆備給は原抑圧の唯一無二のメカニズムである。本来の抑圧(事後の抑圧)においては、これに前意識からの備給の撤収が加わる」(Freud. Das Unbewußte, 1915, GW., X, p. 280)。心理学草稿においてすでにフロイトは、この図式をエマの症例で説明している。かの女が13歳のとき、かの女の着物について店にいた男から嘲笑されたことによる外傷は、遡って、かの女が8歳のとき食料品店でその主人から性的嫌がらせを受けたことに結びつくことにより、13歳のときの外傷体験(=症状)を生じさせるのであるが、これは8歳のときのエピソード

が抑圧されているということであり、13歳のときのエピソードは抑圧するものであり、8歳のときのエピソードは事後的に抑圧されたものとなるのである。原抑圧は抑圧されたものであり本来の抑圧は抑圧するものである。ラカンが抑圧と抑圧の回帰は同等のものと言っているが、症状等無意識の形成物は抑圧する当のものなのであり事後の抑圧に相当する。心理学草稿においてフロイトは抑圧されたものを黒く塗られた表象と記述している。哲学的伝統からすると、無意識に永遠に止まっている表象とは馬鹿げた考えだとされるだろうが、これをラカンはUn signifiant ne signifie rienとしてsignifiéなきsignifiantはこのフロイトの原抑圧に符合するものということではできよう。

<15>[https://fr.wikipedia.org/wiki/Th%C3%A9orie\\_de\\_la\\_s%C3%A9duction\\_g%C3%A9n%C3%A9ralis%C3%A9e](https://fr.wikipedia.org/wiki/Th%C3%A9orie_de_la_s%C3%A9duction_g%C3%A9n%C3%A9ralis%C3%A9e)等参照のこと。… généralisé(e)は今や流行語となっている。ラカンについても(ラカン自身は小生の知りうる限りはnœud borroméen généralisé - Pierre Sorelyに負っているが - 以外にこのgénéralisé(e)は用いていない)symptôme généralisé, perversion généralisée, forclusion généralisée等々ある。

<16>La censure de l'amante : Et autre préludes à l'œuvre de Michel Fain (actes du colloque d'Anney. 24 avril 1998)も参照のこと。

p. 275

次のように提案はできないだろうか。言語の精神分析的理論で、フロイトに背を向けることなく、言語と無意識の表象という異なったかたちのものを結びつけるような方法を真摯に考察してくれるものはないのかと。まさに、アンドレ・グリーンがこれを試みているのである  
1)。

1. A. Green, « Le langage dans la psychanalyse » (1983) ; « La cure parlante et le langage » (2000), p. 36-68 ; « La représentation de chose entre pulsion et langage » (1987) ; « Psychanalyse, langage, l'ancien et le nouveau » (1979).